

笛平遺跡出土土器棺墓について

川添和暁

北設楽郡設楽町内では、設楽ダム関連の発掘調査で、縄文時代の資料のみならず弥生時代の資料も各所で見つかっており、これから整理調査・報告で、今後、歴史復元の基礎資料が提供されるものと期待される。各遺跡での様相はさまざまであるため、山間部での場の利用の実態に迫るには、個別事例の比較・検討が必要となると考えられる。本稿では、笛平遺跡の土器棺墓について分析した結果を再度報告・検討する。本資料は、使用されている土器の製作自体が当地域の特色がよく表されている上、使用という側面でも興味深い事例となっている。特殊事例なのかもしれないが、当時の葬送儀礼の一端を考える糸口になることが期待される。

1. はじめに

10年以上にわたって行われている設楽ダム関連の埋蔵文化財調査では、愛知県内でこれまでにないほどの縄文時代の調査が集中して行われてきた。この事業ではそれに留まらず、弥生時代の資料も各遺跡で見つかっている。マサノ沢遺跡のように集中した状態で見つかる場合は限られているようであるが（永井編 2023）、西地・東地遺跡をはじめ、上ヲロウ・下ヲロウ遺跡、大崎遺跡などのほか、近年の根道外遺跡の調査と、各遺跡の情報を統合・整理することで、山間部での活動様相が今後明らかになることが、大いに期待されるところである。

本稿では、笛平遺跡で調査された弥生時代前期の土器棺墓について再度取り上げることとする。本資料は、棺身として使用されている土器の製作自体で当地域の特色がよく表されている上、使用という側面でも興味深い事例となっている。分析により、当時の葬送儀礼の一端を考える糸口になることが期待されよう。

2. 笛平遺跡について

笛平遺跡は豊川最上流の境川左岸に位置する（図1左）。遺跡は西へ張り出す段丘上に立地する。段丘は二段になっており、大半を占める高位の山側は標高387m前後であり、一段

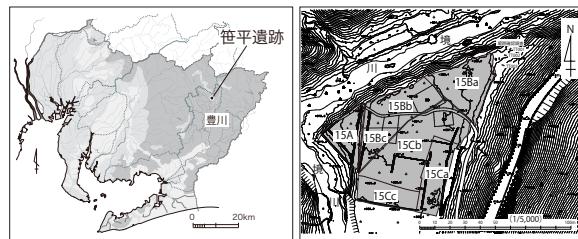


図1 笛平遺跡位置（左）と調査区位置図（右）

低い川側が標高385m前後である。戦前から知られている遺跡であるが、本格的な発掘調査は2015年5月～12月の全面発掘調査のみである。調査では川側の低い段丘部分を15A区、高い段丘部分の西半分を15B区、東半分を15C区とした、調査区を設定した（図1右）。その後、2019年4月から2021年3月まで室内整理調査が実施され、2022年3月に報告書が刊行された（鈴木編 2022）。

笛平遺跡は、縄文時代早期、縄文時代中期後半、後期初頭～中葉、後期後葉～晩期、弥生時代前期、古代（平安時代）と、長期にわたり活動痕跡の認められる遺跡で、発掘調査では主に縄文時代中期後半、後期初頭～中葉、後期後葉～晩期の集落調査が主体となった。弥生時代前期の資料としては、条痕文土器が遺跡内にわずかに散在している程度であったものの、土器棺墓1基が、唯一の遺構として調査された。

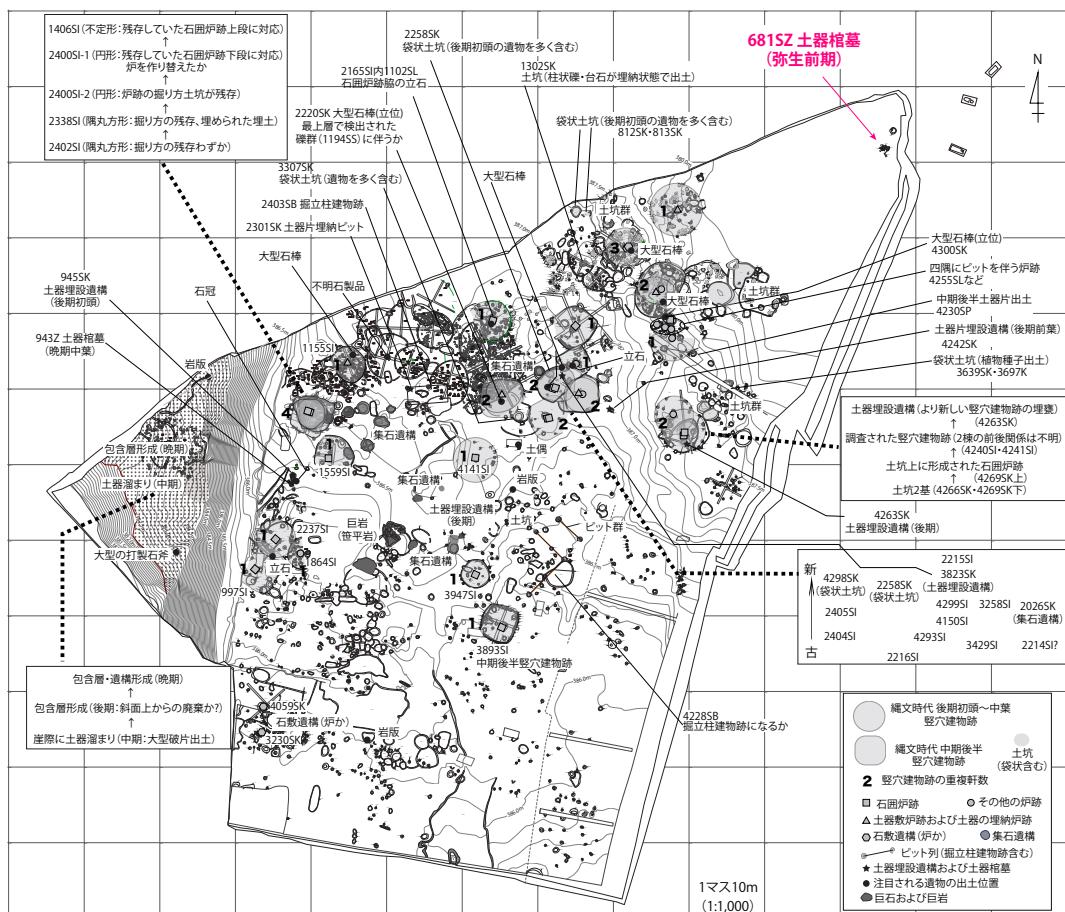


図2 笹平遺跡遺構位置図 (1/1,1000)

3. 弥生前期土器棺墓の検討

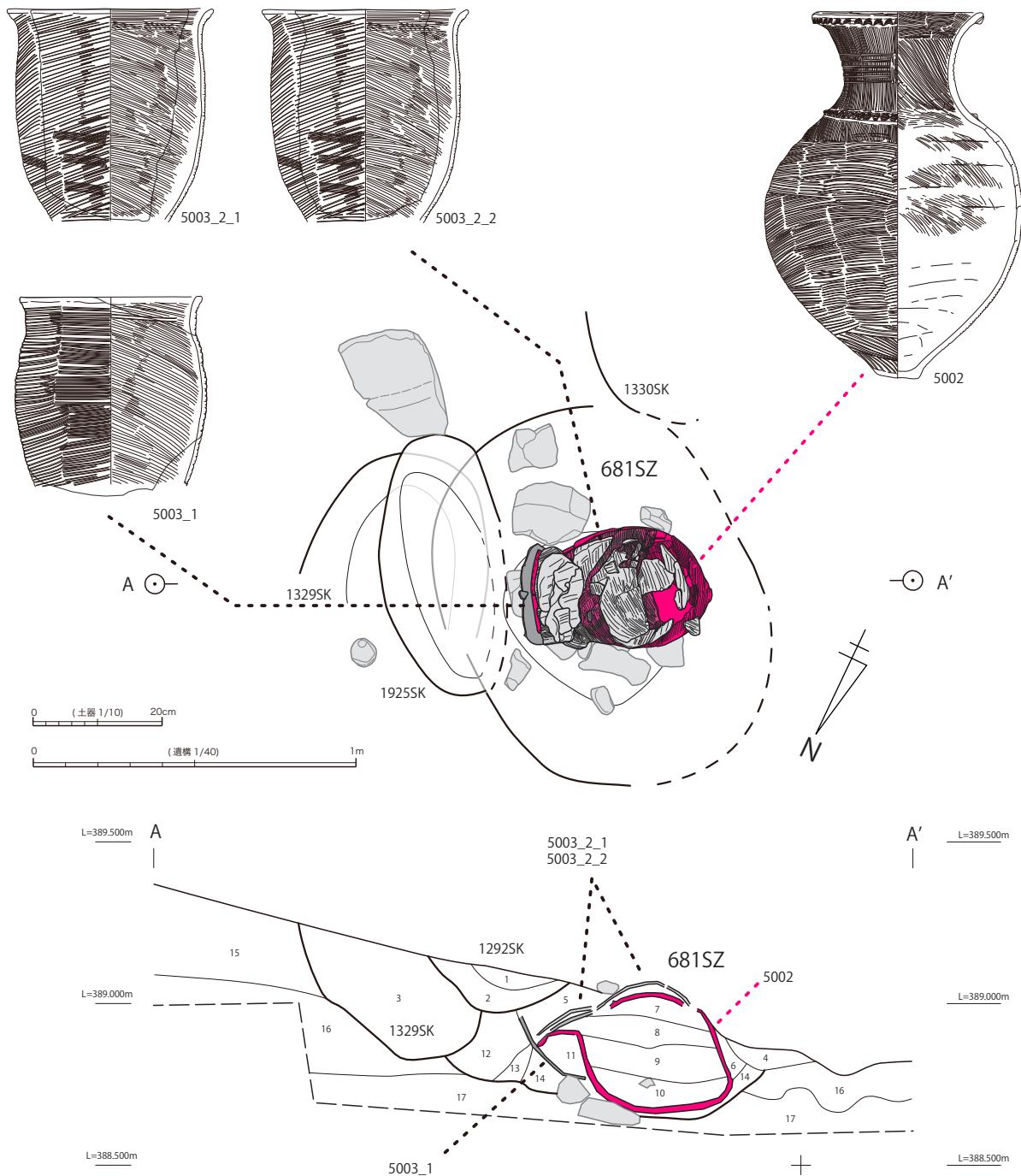
弥生時代前期土器棺墓 681SZ は、調査区北東端で単独で見つかった（図2）。

土器棺墓の出土状況の詳細は図3にまとめた。以下、これをもとに土器棺墓について見ていく。棺身が条痕文系大型壺（5002）、蓋が条痕文系深鉢の大型破片（5003-1、2）で構成されるもので、棺の口縁部は北東方向に向かって横位に埋設されていた。棺身は口縁部から頸部にかけての2分の1が欠失しており、さらに胴部下半にも 15×7cm 程度の欠落が認められる。棺身の埋設は、これら欠損部分を上側に、完存している側を下側にして置かれていた。配置に際しては、径 10～30cm の片麻岩角礫が複数個が近接して配されており、埋設時に棺身

* 土器キャッシュ 5002 および 5003-1・2 は、報告書と同一番号である（鈴木編 2022）。

を固定したものと考えられる。棺蓋は、棺身口縁部を埋設状態の上下で覆うようにし、さらに棺身の埋設状態の上面に重ねるように配されていた。発掘調査当初は同一個体と考えられていたが、室内整理調査の結果、2 個体存在することが明らかとなった（5003-1、2）。5003-1 は棺身口縁部下側に敷かれたもので、口縁部側が棺身胴部側に向けられていた。口縁部から胴部下半までの全周比 2 分の 1 程度の残存である。5003-2 は棺身上面に配されたもので、同一個体とは考えられるが接合しない 2 つの大型破片で構成されていた（5003-2-1、2-2）。大型破片はいずれも口縁部から胴部下半までの全周比 4 分の 1 程度の残存である。

これら土器棺墓を構成する土器については、条痕文とハケ目が共存していることで、出土以来注目してきた。5002 の胴部外面は二又工具による条痕文が、口縁部および頸部隆帯にはネガイ科表面による押圧がある一方、頸部外



- 1 10YR3/1 黒褐色 シルト層 灰黄褐色シルトブロックを少量含む。(1292SK1層)
 2 10YR3/2 黒褐色 シルト層 灰黄褐色シルトブロックを少量含む。(1292SK2層)
 3 10YR3/2 黒褐色 シルト層 中疊の垂角疊を少量含む。(1329SK)
 4 10YR3/2 黒褐色 シルト層(根痕)
 5 10YR3/2 シルト層 中疊の角疊を極少量含み、灰黄褐色シルトブロックを少量含む。(681SZ)
 6 10YR2/2 黑褐色 シルト層 黄褐色シルトブロックを下部に少量含む。(681SZ)
 7 10YR2/2 黑褐色 シルト層 中疊の垂円疊を極少量含む。(681SZ)
 8 10YR2/2 黑褐色 シルト層 黄褐色シルトブロックを少量含み、中疊の垂角疊を少量含む。(681SZ)
 9 10YR2/2 黑褐色 細粒砂極少量含むシルト層 黄褐色シルトブロックを極少量含む。(681SZ)
- 10 10YR2/3 黑褐色 シルト層 暗褐色シルト・灰黄褐色シルトブロックを含む。やや肌理細かい層(681SZ)
 11 10YR4/2 灰黄褐色 シルト層 上部に黄褐色シルトブロックを多く含み、下部に黒褐色シルトブロックを多く含む。(681SZ)
 12 10YR3/2 黑褐色 シルト層 灰黄褐色シルトブロックを少量含む。(681SZ)
 13 10YR4/2 黑褐色 シルト層(681SZ)
 14 10YR3/2 黑褐色 シルト層 黄褐色シルトブロックを含む。(681SZ)
 15 10YR2/2 黑褐色 シルト層 中疊の角疊を少量含む。
 16 10YR3/2 黑褐色 細粒砂少量含むシルト層 下部に黄褐色シルトブロック含む。(地山)
 17 10YR5/4 にびい黄褐色 細粒砂含シルト層 上部に灰黄褐色シルトブロックを含む。(地山)

図3 笹平遺跡 弥生前期土器棺墓 681SZ (鈴木編 2022 より改変)

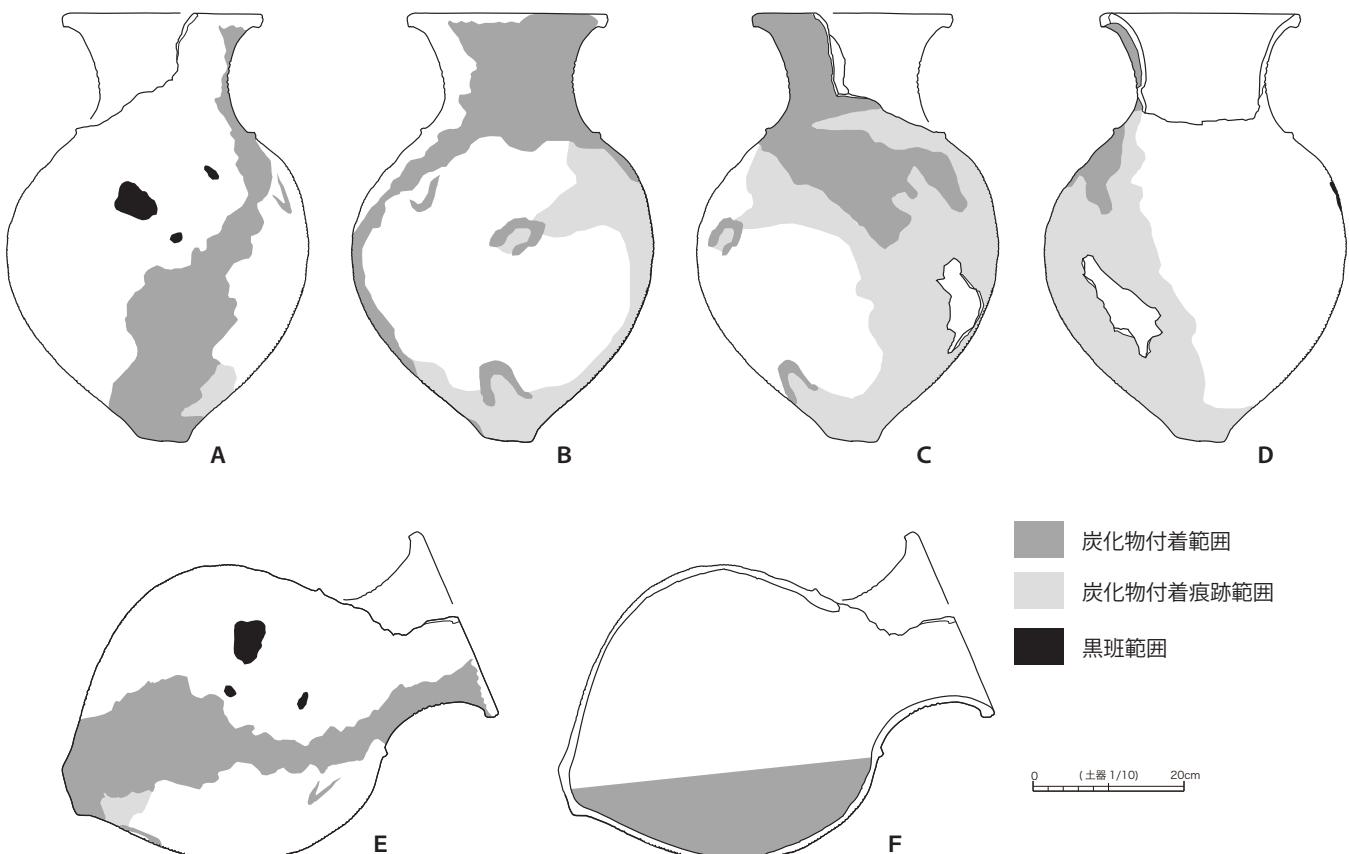


図4 681SZ 棺身使用土器 E-5002 焼成痕および炭化物付着状況

14



写真 左：681SZ 棺出土状況（南より）、中央：棺身使用土器 5002（B面）、右：内面炭化物付着状況（底部付近）

面および内面にはハケ目が調整があり、さらに頸部外面には浅い太沈線が5条巡る。5003-1および2も、器面外面は二又工具による条痕文が施されているが、内面はハケ目が施されている。いずれも条痕文土器でありながら、遠賀川系土器の製作技法が共存する。

一方、棺身5002の使用痕跡などを見ると、炭化物付着および二次焼成痕が明瞭である。それを図示したのが図4で、A～Dは土器を正位

状態にした際の展開図（B面が図3掲載の土器図面の正面）で、E・Fは使用痕跡を水平近くに据えた際の図である。これらから分かるように、5002はこの横位状態で煮沸の使用がなされたことが明らかといえる。しかし、発掘調査時には周囲の土壤および角礫には被熱の痕跡は確認されなかったことから、煮炊きに使用後、使用と同様の位置で、当地に移動の上、埋設された可能性が考えられる。

4. 科学分析

使用土器について、①放射性炭素年代測定、および②炭素・窒素安定同位体比の科学分析を

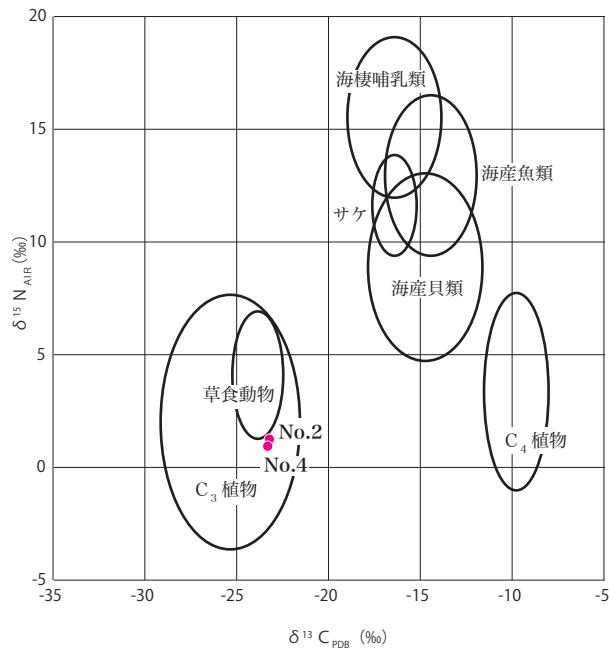
表1 (左) 測定試料および処理、表2 (右) 放射性炭素年代測定および暦年校正の結果

測定番号	遺跡データ	試料データ	前処理
PLD-30737	遺構: 681SK 試料 No.1 遺物 No.18-1	種類: 土器付着化物 器種: 壺 (E-5002) 部位: 胴下部外面 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-30733	遺構: 681SK 試料 No.2 遺物 No.18-1	種類: 土器付着化物 器種: 壺 (E-5002) 部位: 胴下部内面 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-30738	遺構: 681SK 試料 No.3 遺物 No.18-2	種類: 土器付着化物 器種: 壺 (E-5002) 部位: 胴中部外面 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N)
PLD-30734	遺構: 681SK 試料 No.4 遺物 No.18-2	種類: 土器付着化物 器種: 壺 (E-5002) 部位: 胴下部内面 状態: dry	超音波洗浄 有機溶剤処理: アセトン 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-30741	遺構: 681SK 試料 No.9 遺物 No.土器 14	種類: 土器付着化物 器種: 深鉢 (E-5003) 部位: 胴部外面 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 1.0N, 塩酸: 1.2N)
PLD-30742	遺構: 681SK 試料 No.10 遺物 No.土器 14	種類: 土器付着化物 器種: 深鉢 (E-5003) 部位: 胴部内面 状態: dry	超音波洗浄 酸・アルカリ・酸洗浄 (塩酸: 1.2N, 水酸化ナトリウム: 0.1N, 塩酸: 1.2N)

測定番号	$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}(\text{\%})$	暦年校正用年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代 (yrBP $\pm 1\sigma$)	14C 年代を暦年に較正した年代範囲	
				1 σ 暦年代範囲	2 σ 暦年代範囲
PLD-30737 18-1 胴下部外面 試料 No.1	-21.85 ± 0.22	2276 ± 21	2275 ± 20	395-361 cal BC (68.2%) 399-356 cal BC (70.7%) 287-234 cal BC (24.7%)	
PLD-30733 18-1 胴下部内面 試料 No.2	-22.33 ± 0.24	2541 ± 20	2540 ± 20	794-756 cal BC (58.7%) 679-671 cal BC (6.2%) 604-599 cal BC (3.2%)	797-748 cal BC (62.2%) 685-667 cal BC (10.0%) 641-587 cal BC (18.6%) 581-556 cal BC (4.6%)
PLD-30738 18-2 胴中部外面 試料 No.3	-23.96 ± 0.13	2426 ± 19	2425 ± 20	536-528 cal BC (4.8%) 521-416 cal BC (63.4%)	731-691 cal BC (11.5%) 660-651 cal BC (2.1%) 544-408 cal BC (81.9%)
PLD-30734 18-2 胴下部内面 試料 No.4	-23.87 ± 0.26	2539 ± 20	2540 ± 20	793-756 cal BC (54.9%) 680-671 cal BC (7.3%) 606-597 cal BC (6.0%)	796-747 cal BC (58.4%) 685-667 cal BC (10.7%) 642-555 cal BC (26.2%)
PLD-30741 土器 14 胴部外面 試料 No.9	-24.86 ± 0.13	2425 ± 19	2425 ± 20	517-416 cal BC (68.2%)	731-691 cal BC (10.9%) 660-651 cal BC (1.9%) 544-408 cal BC (82.6%)
PLD-30742 土器 14 胴部内面 試料 No.10	-25.98 ± 0.23	2405 ± 21	2405 ± 20	489-409 cal BC (68.2%)	725-720 cal BC (0.5%) 704-695 cal BC (1.2%) 541-402 cal BC (93.7%)

表3 炭素・窒素安定同位体比測定結果

試料 No.	試料種	安定同位体比 (%)		C/N 比
		$\delta^{13}\text{C}_{\text{PDB}}$	$\delta^{15}\text{N}_{\text{AIR}}$	
No.2	土器付着化物	-23.2	1.23	27.3
No.4	土器付着化物	-23.3	0.900	27.8



実施した。分析は株式会社パレオ・ラボによるもので、図・表を編集して掲載した。

①放射性炭素年代測定 (表1・表2) 表1のように、試料は5002の表・内面からそれ2点ずつ、5003に関しては表・内面からそれ

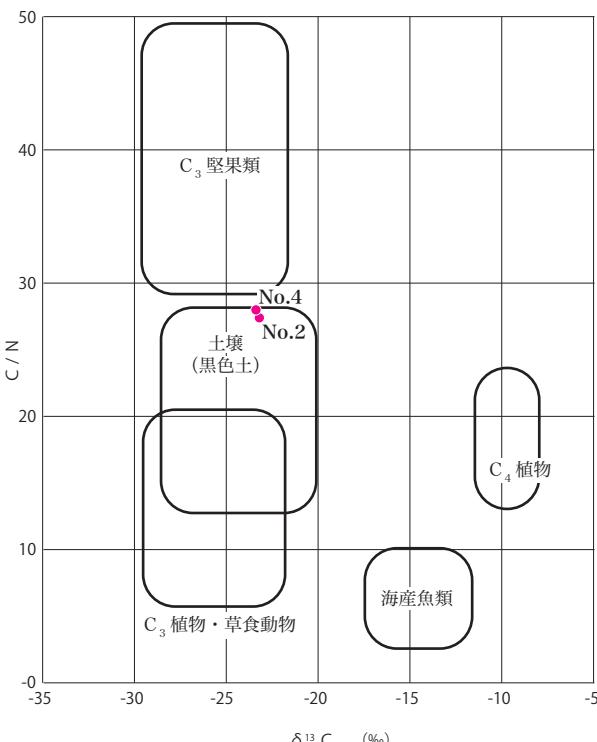


図5 左: 炭素・窒素安定同位体比、右: 炭素安定同位体比とC/N比の関係 (吉田・西田 2009に基づき作成)

それ1点ずつ採取された。5003では外・内面の試料とともに2500y.B.P.～2400y.B.P.の年代となっており、5002でも外面から採取された試料3では同様の年代地が得られている。一方、5002の内面から採取された試料2・4では2700y.B.P.と古相の年代値が得られている。

②炭素・窒素安定同位体比分析（表3・図5）

5002の内面炭化物を試料とする試料2・4では、炭素・窒素安定同位体比分析なども実施した（図5左）。試料はいずれも、C₃植物の範囲、草食動物の範囲に接する位置の、ほぼ同一位置上にプロットされた。一方C/N比で見ると、土壌（黒色土）の範囲内であるが、C₃堅果類の範囲に接する位置にプロットされた。以上から、5002の内面炭化物は、植物質で堅果類由来のものが多数占めたものであったと推測される。

5.まとめ

以上の分析結果をまとめてみる。

（ア）棺身に使用された大型壺5002は、横位状態で煮炊きに使用されていた。炭化物は堅果類が主体であったことから、煮炊きは堅果類の調理に使用されたものと想定される。

（イ）発掘調査では、土壤に被熱の痕跡が確認されなかつたこと、かつ配置を固定させていた片麻岩角礫にも被熱の痕跡が認められないことから、大型壺は現地とは別の場所で煮炊きが行われた可能性が考えられる。この想定が正しければ、その後大型壺が現地に運ばれ、煮炊きの使用状態で再び埋設されることになる。埋設場所がそのまま煮炊きの場所とでないものの、埋設地との物理的距離については不明である。

（ウ）当該時期の深鉢や大型壺の埋設遺構は土器棺墓と呼ばれ、埋葬施設であったと一般的に知られている。吉胡貝塚では土器（棺）内か

ら実際に再葬された人骨が出土しており、このことを裏付けている（斎藤ほか1952、増山・坂野編2007）。特に弥生時代前期の大型壺を用いたものは成人骨再葬墓として知られている。

以上の内容をすべて含め、一案として以下の仮説を提示してみたい。

再葬前に大型壺で調理を行い、それらの食事を参列者の皆でとった。その後、埋葬場所まで土器を移動し、それを棺身にした。棺には別の場所で骨化した人骨を納め、深鉢片で蓋をして土をかけた。

大型壺が煮炊きされた場所と埋設された場所とは異なるとはいえ、遠く離れた距離を想定する必要はなく、ごく近かった可能性もある。いずれにしても、このように壺棺再葬墓での埋葬行為を行う際に、棺身に使用される土器で事前に煮炊き調理して、共食のような行為がおこなわれていた可能性を想定したい。縄文時代晚期以降、東海地域・関西地域で土器棺墓が群集化する様子が知られている（川添2011）。縄文時代の場合、棺に使用されている土器は、煮炊きの痕跡のある深鉢を主体としているため、日常的に使用されていたものを棺に転用したとする考え方方が主体である。深鉢は日常的な煮沸道具であるため、場面の詳細な識別は難しいものの、煮炊き（調理）の一部は葬送儀礼行為の一環として行われていた可能性であろう。

縄文時代・弥生時代の事例をすべて同一視して扱うことはできないことは、十分に承知している。しかし、（ウ）の内容の考慮を含めて、今後他類例の分析が進めば、本仮説の可否について議論が深化されるものと期待されよう。

謝辞 本稿を草するに際して、以下の方々および機関には、格別のご配慮およびご教示を賜った。ここに謝意を表する次第である。

株式会社パレオ・ラボ、
阿部芳郎、石黒立人、宮腰健司

参考文献

- 川添和暁 2011『先史社会考古学—骨角器・石器と遺跡形成からみた縄文時代晚期ー』 東京 六一書房
- 斎藤 忠ほか 1952『吉胡貝塚』 文化財保護委員会
- 鈴木正貴編 2022『笛平遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第215集
- 永井宏幸編 2023『マサノ沢遺跡』 愛知県埋蔵文化財センター調査報告書第219集
- 増山禎之・坂野俊哉編 2007『国指定史跡吉胡貝塚（I）』 田原市埋蔵文化財調査報告書第1集
- 吉田邦夫・西田泰民 2009「考古科学が探る火焔土器」『火焔土器の国 新潟』 88～99頁 新潟県立歴史博物館